Marc D. Hauser, *Moral Minds* Prologue and Ch. 1 (pp. xvii-31)

吉田　敬（UTCP）

Prologue (pp. xvii-xx)

- この本の中核となる考え：われわれは道徳本能を進化させてきた。道徳本能は、行動の、無意識的な文法に則り、道徳的に正しいか誤っているかの判断を可能にする。
- 行動の、無意識的な文法と言うとき、ハウザーが念頭に置いているのは、チョムスキーによって提唱され、ピンカーによって発展させられた、普遍文法という考えである。普遍文法はわれわれの言語能力の中核であり、われわれに生得的に備わっている。
- チョムスキーやピンカーの議論は言語についてだが、ハウザーは同じように、道徳的な普遍文法があると主張する。
- （※ハウザーは、moral mindsやmoral instinctsのように複数形を用いているが、何か意味があるのかどうか注意する必要があると思われる。）

1. What’s Wrong? (pp. 1-2)

- 日常的な道徳的判断は、明確な原理による、意識的推論に基づいていると考えられているが、こうした原理がわれわれの道徳的決定の源であるとは限らない。むしろ、ハウザーによれば、道徳的判断は無意識的過程に媒介されている。その過程とは、自分や他者の行為の原因や帰結を評価する、隠された道徳的文法である（道徳哲学から道徳心理学へ）。
- この本の目的は、どのようにわれわれの道徳的直観が働き、なぜそれが進化してきたのか、明らかにすることである。全ての人間の心は、進化の過程で、 無意識的、自動的に道徳的判断を生成する道徳本能を獲得してきた。

1. What’s Wrong? (pp. 2-4)

- 自然主義的誤謬、あるいは事実（記述）と規範の二元論
- G. E. ムーア：善であるものに訴えることによって、特定の道徳原理を正当化することはできない。つまり、善であるものと自然であるものを同一視することはできない。
- より一般的な拡張：記述的原理から規範的原理を導き出すことはできない。
- こういった立場を取ると、経験科学、特に生物学上の知見は倫理や道徳を考える上で役に立たないということになる。（伝統的な道徳哲学の立場）
- しかし、ハウザーの考えでは、事実（記述）から価値判断を導くことが正当な場合もある。したがって、それぞれのケースを見る必要がある。

1. What’s Wrong? (pp. 4-8) The Real World

- 現実世界には様々なディレンマがあるが、道徳的ディレンマにはどのような特徴があるだろうか。（例　異なる義務同士の衝突）
- 道徳的ディレンマの一例：『ソフィーの選択』（1979）
- ユダヤ人強制収容所での選択：娘と息子のどちらかを生かすように選ぶか、選ばずにどちらも死なせるか（ソフィーは息子を選び、その後罪悪感に駆られて、自殺した）。
- こうした事例を考える場合、われわれはまず、ディレンマに対して自動的に反応し、その後で自分が当事者だったときに、どうするだろうかと批判的に評価するように思われる。確かにわれわれは何かを感じるけれども、感情が判断を引き起こしたのだとは必ずしも言えない。むしろ、感情的反応は、行為者の行為の原因や帰結の無意識的な分析に従う。この分析こそがわれわれの道徳的能力の本分なのである。

1. What’s Wrong? (pp. 8-11) The Real World

- 原則やルールに従って、意識的に推論することで、ディレンマは解決されると考える者は、感情の因果的な力に反対する。この立場を極端にすると、感情は障害でしかなく、よく考えれば、道徳的ディレンマは解消する。つまり、道徳は物理学のようなものであり、われわれがディレンマに悩まされるのは、明晰に、合理的に思考していないからだ。
- ここで、怪我をしている子供を自分の新車に載せるかどうかという問題とアフリカで死にかけている子供を救うために寄付するかどうかという問題を考えてみよう。前者の場合には、われわれは子供を助けるが、後者の場合にはそうでないことが多い。上述の立場を取るものは、この違いについて、納得のいく説明ができない。進化論的には、われわれは自分の近くにいる人々（例えば血縁）を助けるような機会を与えられてきたということで説明がつく。
- （※利他行動の進化については、諸説ある。血縁淘汰説［ハミルトン］、互恵的利他主義［トリヴァース］、強い互恵性［ギンティス、フェール］等々）
- 推論と感情は、われわれの道徳行動に何らかの役割を果たすけれども、どちらも道徳的判断に導く過程を完全に表しているとは言えない。

1. What’s Wrong? (pp. 12-15) Ill Logic

- ホッブズ：理性によってのみ、われわれは、正義に関する、一貫したシステムを持続することができる。
- デカルト：情念を取り除き、理性と合理性の過程に勝利を収めさせよ。
  - 1. 個々の事例に注目し、判断を下していくアプローチ
  - 2. 個々の事例から独立した、一般的な原理を提示しようとするアプローチ（カントの定言命法）
- カントの定言命法：自分の格率が普遍的な法となることを望むような形で、行為せよ。定言命法とは無条件の命令のこと（例　殺すなかれ。嘘をつく事なかれ等々）。
- 定言命法の第二形式：あなた自身のものであれ、他人のものであれ、人間性を単なる手段としてではなく、それと同時に、目的として扱うような形で、行為せよ。
- カントは確かに、感情の役割を認めるものの、われわれの道徳的判断は究極的には、意識的な推論によって、もたらされると考える。
- しかし、厳格なカント主義者は、ナチに追われたユダヤ人の少年を救うために嘘をつけるだろうか。あるいは、数人を救うために一人を犠牲にできるだろうか（→トロリー問題）。

1. What's Wrong? (pp. 16-21) Ill Logic

- ピアジェとコールバーグの道徳心理学：子供の発達の目標は、完全に合理的な生物へと育て上げることである。その意味で、心理学はプラトンとカントの哲学に従う。
- コールバーグ：道徳的発達の六段階説
- 前慣習的水準　1. 服従と罰　2. 自己利益
- 慣習的水準　3. 他者との一致・調和　4. 権威・社会秩序遵守
- 脱慣習的水準　5. 社会契約　6. 普遍的な倫理原則
- コールバーグの説には様々な問題がある。特に、推論が先なのか、後なのかという問題が未解決である。例えば中絶問題の場合に、コールバーグ説を取れば、意識的に明確化された原理（中絶は殺人である）から注意深く推論された判断（殺人は禁じられている）へと至るが、われわれは無意識に中絶問題に否定的な感情を持って反応し、それが判断（中絶は間違っている）を引き起こした後で、後付的に合理的説明をしているとも言える。われわれが意識的で、合理的な形の推論をしているからと言って、それが道徳判断を支える、唯一の形ということにはならない。

1. What’s Wrong? (pp. 22-26) Passion’s Way

- ヒューム：われわれの道徳的判断をわれわれの感覚や認識と同じ仕方でとらえようとする。
- 「理性は情念の奴隷であり、しかもそうあるべきだ」
- 生得的な道徳感覚は、意識的な推論なしに、筋の通った判断を下すための手段を提供する。感情が道徳的判断に火をつけ、理性はそれに従う。理性はわれわれに自分の目的と手段について考えさせるが、われわれの選択や選好を動機づけたりはしない。
- 意識的な道徳推論はわれわれの道徳的判断に関して、何の役割も果たさないことがよくあり、多くの場合、それまでに持っていたバイアスや信念の後付的な正当化や合理化を反映している。
- 道徳的真理は、われわれの事物の色の認識が変わりうるように、異なる条件下で変わりうる。

1. What’s Wrong? (pp. 27-28) Passion’s Way

- カント主義者からヒューム主義者への挑戦
- 1. カント主義者はある判断を下すためには、良い理由がなければならないと言う。他方で、ヒューム主義者はそれが正しいと思われたからだと答えるにとどまる。それでは単なる好みの問題ではないのか。
- 2. 感情に基づいて、何が正しくて、何が間違っているのかを決めるとすると、公平性や客観性はどのように達成されるのか。
- （※この二点を押し進めると、プリンツのような道徳相対主義に行き着く）

1. What’s Wrong? (pp. 28-31) Passion’s Way

- カントにとってのコールバーグ、ヒュームにとってのホフマン
- ホフマン：共感を重視。「共感は、他者への人間的関心の生命であり、社会生活を可能にする接着剤である。」
- 子供の共感の最初期形はほとんど、自動的で、無意識であり、模倣がしばしば引き金となっている。他者、特に大人の顔の表情などを真似ることで、運動系（motor system）は感情系に伝達する（※ミラーニューロン）
- 成熟して行くにつれて、子供は他人の身になれるようになり、更に、他者の知識、信念、望みを考慮に入れる共感の形を身につけるようになる。
- 確かに、感情はわれわれの道徳的行動に役割を果たすが、どのようにわれわれが何が正しくて、何が間違っているのかを判断するのか説明できないし、どのように子供が社会的規範一般と道徳的規範を区別するようになるのかも説明できない。われわれは、感情を引き起こす評価過程を理解する必要がある。感情は道徳的判断を生成するというよりも、ある方向ではなく別の方向へとわれわれを向かわせる重りのようなものかもしれない。
- 直観は早く、自動的で、非意志的であるのに対し、原理に基づいた推論はゆっくりで、熟慮に基づいている。全ての二分法と同じく、その中間がある。第三の立場を考えていく上で、さしあたりこの二つの立場から始めよう。